

CDMA VS

とCDMA2000に二分化されていく傾向にある。

IMT2000の候補として、とかく比較されるW・CDMAとCDMA2000だが、どちらもcdma方式ということに変わりはない。

CDMAとは「符号分割方式」と訳されるが、従来、第二代といわれるPDC方式では、五〇キロヘルツの間に三、六人の人数を割り振って伝送するのを、五メガヘルツ(W・CDMAの場合)という広帯域に、各人のデータに固有の符号(コード、またはアテ先を付け、バラバラに拡散して伝送する方式にしたものだ。すべての基地局が同じ周波数帯を使用することになり、広帯域で利用したデータの高速通信も可能になるわけだ。では、なぜ二〇〇二年、CDMA2000に移行するKDDI陣営が一時は心変わりを起こすほど、W・CDMA優位という風潮があるのか。それはその「広帯域」にある。先述したようにCDMA2000を採用する勢力は、W・CDMAと同等の五メガヘルツ幅による二メガビット/秒で通信が可能な「3X」と呼ばれる規格があるにもかかわらず、一・四八メガヘルツ幅で一四四キロピッ

ト/秒と、W・CDMAに遠く及ばない「中速通信」の「1X」規格を採用する見通しだからだ。

CDMA2000陣営の切り札「HDR」

一九九三年、米国クアルコム社により「IS-95」の規格名で生まれたcdmaOneは、GSMには及ばないにせよ、北米を中心に世界に五〇〇〇万人以上のユーザーを抱える。最大の強みはcdma方式をすでに取り入れているところで、ドコモのPDCや欧州各国のGSMといった第二代とIMT2000の第三代の間にブレCDMA2000である二・五世代を作り上げている点。そのcdmaOneで利用している周波数は一・四八メガヘルツ幅。既存のインフラで一四四キロピッ/秒通信が可能であり、北米を中心とするcdmaOneを採用するキャリアにとっては、設備投資を最小限に抑えられる。そしてIMT2000事業者免許申請のわずか一〇日前にKDDIを自陣に取り戻したクアルコムの切り札が、「HDR」と呼ばれる

1Xをベースにした通信システムである。これは既存の有線設備・無線通信区間において、音声とデータ通信を完全に切り離し、最大二・四メガビット/秒という高速データ通信を可能にする。KDDIの移り気は、HDRのポテンシャルがどこまでドコモに対抗できるオプションになりうるかを認めるまでに時間がかったからだといえよう。

といつても、国際ローミングでの汎用性やIMT2000への移行時期を考慮すると、やはりW・CDMAに分があるか。ドコモが二〇〇一年、欧州各国では二〇〇二年からスタートするW・CDMA陣営に対して、CDMA2000への移行時期としては、国内ではKDDIが二〇〇二年、開発国である米国に至っては二〇〇五年になる。

アマゾン・ドット・コムやヤフーの例を持ちだすまでもなく、国内のドコモ独走という現実を見るにつけ、コンテンツやサービスの優劣だけでは語れない、フロンティア優位という業界の掟がうかがい知れる。その意味で、CDMA2000陣営の今後は、HDRという切り札をどう生かしていくのかにかかっている。



Creation date: 11-16-2004
Indexing Officer: SODUYELA - SAMUEL ODUYELA
Team: OIPEBackFileIndexing
Dossier: 09955063

Legal Date: 05-26-2004

No.	Doccode	Number of pages
1	IDS	2
2	FOR	17
3	FOR	18
4	NPL	11
5	NPL	3
6	NPL	4
7	NPL	2

Total number of pages: 57

Remarks:

Order of re-scan issued on